

それから川幅30メートルほどの音更川の河口があり、その川筋には人家が21軒ありました。この川の源はクマネシリ岳の後方にある、陸別、常呂の山々の間から流れ出ており、十勝川第2の支流にあたります。

さて、川に沿って西側の崖を進んできましたが、茅室岳、パイロ岳などの山々まで遮るものもなく茅原が続いて見えます。音更川を過ぎて小川のチョマトーの辺りは谷地で、アシヤオギの原を越えていきます。ビバイルからおよそ18キロで幅15メートルほどの帯広川に到着しました。ここには人家が2軒あり、いずれも4人家族のアルランコキエ家、アイシテ家です。

あたり一帯の長老のシリリサ（71歳）がここまで、私たちを迎えに出向いてくれましたので、ここ帯広で泊まることにしました。明日からは舟で十勝川を下る計画なので、舟の手配を頼みました。この帯広川は十勝川第9の支流で、札内川の流域の戸蔦別川から来ているといっています。この川の流域は一帯が広い平野で、土地が非常に良く肥えています。

3月17日

早朝、霧が立ち込めて暗い中、用意されていた丸木舟2艘で出発しました。川を下る案内役はシリリサのせがれのイル



チョマトー

アイヌ同士の戦いで多くの血が流れ込んだという伝説が残る沼。チ・ホマ（害を受ける）トウ（沼）という意味。



音更川

この一帯は髪のように多く柳が生えたため、アイヌ語で「オトブケ（髪が生える）」と言われたとされる。